

平成18年 3月30日	病害虫発生予報 4月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
----------------	------------------------------	------------------------

安全・安心な農作物は、農薬使用の記録と農薬使用基準の遵守から！
農薬の総使用回数は「有効成分」で規制されます

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
ナシ：黒星病	1
果樹共通：カメムシ類	1
イチゴ：うどんこ病	2
促成・半促成ピーマン：ヒラズハナアザミウマ，ミカンキイロアザミウマ	2
促成キュウリ：褐斑病，べと病	2
施設野菜(イチゴ，トマト)：灰色かび病	3
【その他の病害虫】	4
麦類，春ハクサイ，イチゴ，促成・半促成ピーマン，促成トマト，促成キュウリ，メロン	
II. 病害虫ミニ情報	
麦類の赤かび病防除対策について	5
水稻の育苗箱施薬について	6
農薬登録速報(2月)の概要	9
III. 今月の気象予報 10	
IV. テレホンサービス 10	
029(226)5321, 6131	

本文に記載された農薬の登録内容は、平成18年3月22日現在のものです。
農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認してください。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel:029-227-2445
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県南・県西地域

[予報の根拠]

- ① 平成17年11月上旬の調査で、県南及び県西地域におけるナシ黒星病秋病斑の発病度及び発生地点率は、過去5年中最も高く、ナシ黒星病菌の越冬量は、例年より多いと予想される。

[防除上注意すべき事項]

- ① りん片脱落直前のインダーフロアブル及び落花期のスコア水和剤10は、黒星病を防除する上で特に重要である。県北地域を含め、防除暦を参考に、適期に確実に散布する。
- ② 薬剤散布は、10a当たり300ℓを目安に、かけむらのないよう丁寧に行う。薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。
- ③ 薬剤散布の際は、ドリフト等により薬液が周辺に飛散しないよう、十分注意する。

果樹共通

1. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① チャバネアオカメムシの落葉中の越冬量は、平年より多い(表1)。

表1 チャバネアオカメムシの越冬量

地域	地点数	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	平均値
県北	24	0.0	1.7	1.6	0.2	22.4	0.3	3.6	0.1	0.1	21.7	3.4
鹿行	9	0.2	0.7	0.6	0.2	2.7	0.0	0.7	0.0	0.1	1.8	0.6
県南	6	3.3	2.3	3.6	0.0	1.7	0.5	0.3	0.8	0.0	0.5	1.4
県西	3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	3.7	0.1
全県	42	0.7	1.3	1.5	0.2	12.2	0.3	2.3	0.2	0.1	13.1	2.1

注：地点当たり落葉30ℓ中の地点平均虫数

[防除上注意すべき事項]

- ① ウメの果実やナシの幼果では、越冬成虫による被害を受ける恐れがあるので、園内の発生に注意する。
- ② ナシやカキにおいては、今後の情報に注意する。

イチゴ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、発病葉率、発生地点率とも平年より高い。
- ② 今後は、夜間のハウス内温度がこれまでより高くなるなど、ハウス内は本病がより発生しやすい条件になる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 罹病した葉や果実などは、ハウス内に放置せずにハウス外へ持ち出し土中深く埋める。
- ② 薬剤は、収穫前日数等に注意し、葉裏や葉柄にもよく付着するよう十分な量で丁寧に散布する。
- ③ 曇雨天が続き薬液が乾きにくい場合は、くん煙剤を利用する。
- ④ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一薬剤及び同系統薬剤の連続散布は行わない。

促成・半促成ピーマン

1. ヒラズハナアザミウマ, ミカンキイロアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、促成ピーマンにおける寄生花率は平年並で、発生地点率は平年よりやや高い。半促成ピーマンにおける寄生花率はやや高く、発生地点率は平年並である。
- ② 今後は、気温の上昇に伴い、ハウス内は発生を助長する温度条件になる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 両種とも黄化えそウイルス(TSWV)を媒介するとともに、生息密度が高くなると果実に被害を及ぼすため、防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や花にもよく付着するよう丁寧に行う。
- ③ 薬剤抵抗性アザミウマ類の出現を防ぐため、同一薬剤及び同系統薬剤の連続散布は行わない。

促成キュウリ

1. 褐斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

(促成キュウリ 褐斑病続き)

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、発病葉率は平年並で、発生地点率は平年よりやや高い。
- ② 今後は、気温の上昇に伴い暖房機の稼働時間が短くなり、ハウス内は多湿になりやすく発生を助長する条件になりやすい。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件下での伝染力が高いので、十分に換気しハウス内を除湿する。
- ② 発生の少ないうちに、防除を徹底する。
- ③ 新たな伝染源とならないよう、病斑部は取り除いてハウス外に持ち出し処分する。
- ④ 薬剤は、十分な量で丁寧に散布する。また、耐性菌の出現を防ぐため、同一薬剤及び同系統薬剤の連続散布は行わない。

2. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、発病葉率は平年よりやや高く、発生地点率は平年並である。
- ② 今後は、気温の上昇に伴い暖房機の稼働時間が短くなり、ハウス内は多湿になりやすく発生を助長する条件になりやすい。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハウス内が高温多湿になると発生しやすくなるので、十分に換気しハウス内を除湿する。
- ② まん延すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ③ 薬剤は、十分な量で丁寧に散布する。また、耐性菌の出現を防ぐため、同一薬剤及び同系統薬剤の連続散布は行わない。

施設野菜(イチゴ, トマト)

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 3月下旬現在、促成トマト及びイチゴで、発病株率は平年よりやや高く、発生地点率は平年並～やや高い。促成・半促成ピーマン、キュウリでは、平年並～やや少ない発生である。
- ② 今後は、気温の上昇に伴い暖房機の稼働時間が短くなるなどして、ハウス内が多湿になるなど、発生を助長する条件になりやすい。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハウス内が多湿になると発生が助長されるので、換気、送風、暖房等によりハウス内の湿度を低く保つ。

(施設野菜 灰色かび病続き)

- ② 発生の少ないうちに，防除を徹底する。
- ③ 発生した場合は，発病部位を取り除き，ハウス外に持ち出して処分する。
- ④ 薬剤散布は，薬液が乾きにくくなる午後からは行わず，晴れた日の午前中に行う。また，曇雨天が続き薬液が乾きにくい場合は，くん煙剤を利用する。
- ⑤ 薬剤は，十分な量で丁寧に散布する。また，耐性菌の出現を防ぐため，同一薬剤及び同系統薬剤の連続散布は行わない。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
麦類	赤かび病	発生量：－	コムギは開花期，オオムギは穂揃期が防除適期であるので，防除時期を逃さないよう注意する。
	オオムギ・コムギ縞萎縮病 ムギ類萎縮病	発生量：－	3月下旬現在，コムギでの発生は平年より少なく，オオムギでは平年並の発生である。
春ハクサイ	べと病	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年より多い発生である。発病を確認したら，早期に薬剤散布を行う。
イチゴ	コナジラミ類	発生量：やや少ない	3月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
	アブラムシ類	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。
	ハダニ類	発生量：やや少ない	3月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
促成・半促成 ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並	3月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。発生地点率は平年並であるので注意する。
	タバココナジラミ類	発生量：－	3月下旬現在，発生を認めない。今後は，ハウス周辺からハウス内への侵入が多くなるので，初期防除を徹底する。
促成トマト	オンシツコナジラミ	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年並の発生である。発生地点率は平年よりやや高い。
促成 キュウリ	アザミウマ類	発生量：平年並	3月下旬現在，平年並の発生である。今後は，気温の上昇に伴い，増加しやすくなる。
メロン	つる枯病	発生量：やや多い	3月下旬現在，平年よりやや多い発生である。

II. 病害虫ミニ情報

麦類の赤かび病防除対策について

赤かび病は、麦の品質・収量低下の大きな原因となります。

本病原菌は、人や動物に対して有害なデオキシニバレノール（DON）等の毒素を産生する場合があります。このため、現行の農産物検査規格において、赤かび粒混入率の許容値は0.0%と厳しく設定されているので、本病の防除は不可欠です。

赤かび病の防除適期は、大麦では穂揃期、小麦では開花期（出穂後7～10日）です。表1を参考に、麦の生育状況に応じて効果的な薬剤散布を行ってください。

表1 赤かび病に登録のある主な薬剤（平成18年3月22日現在）

薬剤名	希釈倍数・使用量	収穫前日数 -本剤の使用回数	対象 作物	有効成分-有効成分の 総使用回数
コロナフロアブル	400倍	—5	麦類	硫黄-5
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	14-3	麦類	クロキシムメチル-3
チルト乳剤25	1,000～2,000倍	3-3	小麦	プロピコナゾール-5（根雪前は2，春期以降は3）
	8倍（無人へり散布）	7-3		
	1,000～2,000倍 8倍（無人へり散布）	21-1	大麦	プロピコナゾール-1
トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	30-3（出穂期以降は1）	麦類 （小麦を除く）	チオファネートメチル-3（種子への処理は1，出穂期以降は1）
		14-3（出穂期以降は1）	小麦	
トップジンM粉剤	4kg/10a	30-3（出穂期以降は1）	麦類 （小麦を除く）	チオファネートメチル-3（種子への処理は1，出穂期以降は1）
		14-3（出穂期以降は1）	小麦	
ベフラン液剤25	1,000～2,000倍	21-5（出穂期以降は2）	小麦	イミノクタジン-5（種子への処理は1，無人へり散布は2，出穂期以降は2）
ベルコート水和剤	1,000～2,000倍	21-5（出穂期以降は2）	小麦	イミノクタジン-5（出穂期以降は2）

※ 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ、周辺作物等への飛散に留意して使用してください。

水稻の育苗箱施薬について

育苗箱施薬は、本田での散布に比べて作業は簡便で省力的です。しかし、病害虫が発生する前に薬剤を施用するため、結果的に発生しなかった病害虫に対しても薬剤を処理する場合があります、過剰な防除となる恐れがあります。また、効果の持続期間が長く、対象病害虫が多いほど薬剤は高価になります。このため、これまでの病害虫の発生状況を基にし、適切な薬剤を選択して使用することが必要です。

1. 薬剤の選択

育苗箱施薬では、イネミズゾウムシ等、水稻の生育初期に発生する害虫や、いもち病を防除できます。さらに、穂いもちの発生まで抑制できる薬剤もあります。薬剤を選択する際は、表1～3を参考に、**病害虫の発生状況に合わせて薬剤を選択してください。**なお、播種時や緑化期に施用できる薬剤もあり、作業体系に応じて選ぶこともできます。

2. 使用方法

田植前に散布する場合は、葉が濡れていると薬害を生じやすいので、露を払い落とした後に、専用の計量箱か散布器を用いて所定量を育苗箱の苗の上から均一に散布してください。葉に付着した薬剤は払い落とし、軽く散水して育苗土に落としてください。は種前に使用する場合は、床土に均一に混和します。余った床土は河川や水路に捨てずに適正に処理して下さい。は種時に使用する場合は、は種・かん水後、所定量を均一に散布し、覆土します。

3. 使用上の主な注意点

- ① 使用前に農薬のラベルで農薬使用基準を確認してください。
- ② 軟弱徒長苗、ムレ苗、田植え適期を過ぎた老化苗には、薬害を生じやすいので使用できません。
育苗中は温度管理、水管理に留意して、健苗育成を心がけてください。
- ③ 薬量不足や、散布ムラがあると防除効果が低下するため、所定量を丁寧に散布してください。
- ④ 水田の整地、代かきはていねいに行い、田植後に田面が露出しないようにしてください。
- ⑤ 薬剤の処理は、他の作物を栽培する場所では行わないでください。

4. 主な病害虫の防除のポイント

育苗箱施用剤を使用しても、病害虫の発生期間が長引いた場合は、追加防除が必要です。薬剤による防除だけではなく、適正な施肥や、的確な中干し等を行って、イネを健全に生育させてください。さらに、病害虫の抑制に有効な手段を取り入れ、総合的に病害虫を管理していくことが大切です。

- ・ イネミズゾウムシ：成虫の発生盛期は5月下旬～6月上旬です。湛水状態は成・幼虫の活動に適するため、中干し、間断かんがいをを行い、適正な水管理に努めて下さい。
- ・ イネドロオイムシ：加害の主体である幼虫は、6月上旬頃から発生し、6月が低温多雨であると発生が多くなります。田植後1か月程度経過してからが加害のピークとなるため、効果の持続期間が長い薬剤が適しています。
- ・ 紋枯病：越冬した菌核が代かき時に水面に浮上し、イネの株元に付着して伝染源となります。代かき時に水尻や畦畔沿いの浮遊物は除去してください。
- ・ いもち病：窒素の過剰な施用は、いもち病の発生を助長します。適正な施肥を行って下さい。

表1 主な対象病害虫と薬剤の使用例

対象病害虫	薬剤の使用例(表3掲載の薬剤より)
葉いもち	フジワン粒剤, オリゼメート粒剤
葉いもち + 穂いもち	ウィン箱粒剤, デラウス粒剤, デジタルコラトップ箱粒剤
葉いもち + 穂いもち + 紋枯病	デラウスリンパー箱粒剤
葉いもち + 穂いもち + 紋枯病 + イネミズゾウムシ + イネドロオイムシ	ウィンアドマイヤーグレータム箱粒剤
葉いもち + 穂いもち + イネミズゾウムシ + イネドロオイムシ	ウィンアドマイヤー箱粒剤, Dr. オリゼプリンス粒剤6 デラウスプリンス粒剤06, ジャッジ箱粒剤
葉いもち + イネミズゾウムシ + イネドロオイムシ	フジワンプリンス粒剤
紋枯病 + イネミズゾウムシ + イネドロオイムシ	プリンスリンパー箱粒剤
イネミズゾウムシ	ガゼット粒剤, オンコル粒剤5, パダン粒剤4
イネミズゾウムシ + イネドロオイムシ	アドマイヤー箱粒剤(使用量は育苗箱一箱あたり50gとして下さい), プリンス粒剤, グランドオンコル粒剤
イネドロオイムシ	アドマイヤー箱粒剤, プリンス粒剤, グランドオンコル粒剤

表2 水稻育苗箱施用剤の有効成分及び使用回数(平成18年3月22日現在)

	薬剤名	剤の使用回数	有効成分名	有効成分の総使用回数
殺菌剤	ウィン箱粒剤	1	カルプロバミド	3(本田2)
	オリゼメート粒剤	1	プロベナゾール	2(育苗箱処理及び側条施用は合計1)
	フジワン粒剤	3	イソプロチオラン	3
	デラウス粒剤	1	ジクロシメット	3(本田2)
	デジタルコラトップ箱粒剤	1	ピロキロン	3(本田2)
	デラウスリンパー箱粒剤	1	ジクロシメット フラメトビル	3(本田2) 2
殺虫剤	アドマイヤー箱粒剤	1	イミダクロプリド	3(本田2)
	オンコル粒剤5	1	ベンフラカルブ	1
	ガゼット粒剤	1	カルボスルファン	1
	パダン粒剤4	1	カルタップ	6(種もみ浸漬1, 床土混和及び育苗箱処理及び側条施用は合計1)
	プリンス粒剤	1	フィプロニル	1
	グランドオンコル粒剤	1	ベンフラカルブ	1
殺虫殺菌剤	ウィンアドマイヤー箱粒剤	1	イミダクロプリド カルプロバミド	3(本田2) 3(本田2)
	ウィンアドマイヤー グレータム箱粒剤	1	イミダクロプリド カルプロバミド チフルザミド ダイムロン	3(育苗箱処理及び側条施用は合計1, 本田2) 3(育苗箱処理1, 本田2) 1 3(育苗箱散布1, 本田2)
	ジャッジ箱粒剤	1	ベンフラカルブ プロベナゾール	1 2(育苗箱処理及び側条施用は合計1)
	フジワンプリンス粒剤	1	フィプロニル イソプロチオラン	1 3
	Dr. オリゼプリンス粒剤6	1	フィプロニル プロベナゾール	1 2(育苗箱処理及び側条施用は合計1)
	デラウスプリンス粒剤06	1	フィプロニル ジクロシメット	1 3(本田2)
	プリンスリンパー箱粒剤	1	フィプロニル フラメトビル	1 2(育苗箱散布1)

※ 除草剤の成分であるので、有効成分の総使用回数に注意する。

表3 水稲育苗箱施用剤の農薬使用基準と対象病虫害（平成18年3月22日現在）

薬 剤 名	使用時期 -回数	使用量 (育苗箱 一箱 当たり)	対 象 病 害 虫										備 考			
			い も ち 病	イ ネ ミ ズ ゾ ウ ム シ	イ ネ ド ロ オ イ ム シ	ヒ メ ト ビ ウ ン カ	ウ ン カ 類	ツ マ グ ロ ヨ コ バ イ	ニ カ メ イ チ ユ ウ	イ ネ ツ ト ム シ	イ ナ ゴ 類	その他の病虫害				
殺 菌 剤	ウイン箱粒剤	は種時 ^{※1} ～ 移植当日-1	50 g	○												
	オリゼメート粒剤	移植3日前～ 移植前日-1	20～30 g	○											白葉枯病, もみ枯細菌病	※4
	フジワン粒剤	緑化期～ 移植直前-3	50～75 g	○												
	デラウス粒剤	は種時 ^{※1} (覆土前) ～移植当日-1	50 g	○												
	デジタルコラトップ箱粒 剤	移植3日前 ～移植当日-1	50 g	○												
	デラウスリンバー箱粒剤	移植3日前 ～当日-1	50 g	○											紋枯病	
殺 虫 剤	アドマイヤー箱粒剤	移植2日前～ 移植当日-1	50 g			○								イネヒメモク [®] リハ [®] エ		
			50～80 g	○				○	○					イネサ [®] ミマ		
	オンコル粒剤5	移植前3日～ 移植当日-1	30～60 g	○	○									イネヒメモク [®] リハ [®] エ, イネモク [®] リハ [®] エ	※4	
			60 g											イネシガ [®] レンチュウ		
			50～80 g				○	○						セジ [®] ロウカ		
	ガゼット粒剤	移植前3日～ 移植当日-1	40～70 g	○	○									イネゾ [®] ウムシ, イネヒメモク [®] リハ [®] エ	※4	
			70 g											イネシガ [®] レンチュウ		
			50～70 g				○	○								
	パダン粒剤4	は種前 ^{※2} 又は 移植当日-1	50～100 g			○				○				イネモク [®] リハ [®] エ, コブ [®] ノメカ [®]		
			60～100 g	○										スクミリンコ [®] ガイ (食害防止)		
80～100 g									○				イネゾ [®] ウムシ幼虫			
プリンス粒剤	は種前 ^{※2} -1	50 g		○	○			○	○	○	○	○	イネヒメモク [®] リハ [®] エ, コブ [®] ノメカ [®]			
	は種時 ^{※1} (覆土前) ～移植当日-1			○	○			○	○	○	○	○	イネヒメモク [®] リハ [®] エ, コブ [®] ノメカ [®]			
グラントオンコル粒剤	移植前3日～ 移植当日-1	50 g											フタホ [®] コヤカ [®] , イネサ [®] ミマ	※4		
	移植3日前～ 移植当日-1			○	○	○			○	○	○		セジ [®] ロウカ, イネシガ [®] レンチュウ			
殺 虫 菌 剤	ウインアドマイヤー箱粒 剤	移植2日前 ～当日-1	50 g	○	○	○			○	○			イネヒメモク [®] リハ [®] エ			
		移植当日-1											白葉枯病, イネサ [®] ミマ			
	ウインアドマイヤーグ レータム箱粒剤	移植2日前 ～当日-1	50 g	○	○	○			○	○			紋枯病			
	ジャッジ箱粒剤	移植前3日～ 移植当日-1	50 g	○	○	○	○		○	*			もみ枯細菌病, 白葉枯病 イネヒメモク [®] リハ [®] エ, セジ [®] ロウカ イネシガ [®] レンチュウ *ニカメイチュウ第1世代	※4		
	フジワンプリンス粒剤	緑化期～ 移植当日-1	50 g	○	○	○			○	○	○			コブ [®] ノメカ [®]		
		移植前3日～ 移植当日-1												イネヒメモク [®] リハ [®] エ		
	Dr. オリゼプリンス粒剤6	緑化期～ 移植当日-1	50 g	○	○	○			○	○	○			もみ枯細菌病	※4	
		移植3日前～ 移植当日-1												白葉枯病		
デラウスプリンス粒剤06	は種前 ^{※3} -1	50 g	○	○	○											
	は種時 ^{※1} (覆土前) ～移植当日-1		○	○	○			○	○	○						
プリンスリンバー箱粒剤	移植3日前 ～当日-1	50 g		○	○			○	○				紋枯病, コブ [®] ノメカ [®]			

使用方法：育苗箱の苗の上から均一に散布する

※1 は種時に使用する場合は、使用量を育苗箱の上から均一に散布する

※2 は種前に使用する場合は、使用量を育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5%）の床土に均一に混和する

※3 は種前に使用する場合は、使用量を育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5%）の床土又は覆土に均一に混和する

※4 DCPAを含む除草剤は使用しないこと

農薬登録速報（2月）の概要

平成18年2月期間中（2/1～2/28）に新規・変更登録のあった農薬は、以下のとおりです。なお、農薬の使用にあたっては、必ずラベル等を確認してください。

○ 殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤・殺そ剤等

新規> SDS スミチオンダコニール粉剤DL, オリザトップパック, キラップジョーカー粉剤DL, スミチオンダコニール粉剤DL, チェス顆粒水和剤, ツインパックフロアブル, ホクコーキラップジョーカー粉剤DL, ユキスター水和剤, 協友ダントツ水溶剤, 協友ダントツ粒剤, 協友ベフラン液剤25, 三共ユキスター水和剤, 住友化学スミチオンダコニール粉剤DL, 側条オリゼメートアドマイヤー顆粒水和剤

変更> アルバリン粒剤, ウイスペクト水和剤5, オリゼメート粒剤, ガーデンガードAL, カスケード乳剤, ガットサイドS, カルホス微粒剤F, カルモック, キヒゲンR-2フロアブル, クミアイコサイドDF, クミアイトレボン乳剤, コサイドDF, コロマイト乳剤, サルバトールME, サンクリスタル乳剤, サンケイオリゼメート粒剤, サンケイスマイリンMC, サンケイダイシストン粒剤, サンケイトレボン乳剤, シンジェンタ・トレボン乳剤, スタークル粒剤, スマイリンMC, スミロディー水和剤, ダイシストン粒剤, デランフロアブル, テルスター水和剤, トレボンエアー, トレボン乳剤, ネキリトンK, フルピカフロアブル, ホクコーオリゼメート粒剤, ホクコースタークル粒剤, ホクコーロムダン粉剤DL, ボディーブロー水和剤, ヤシマスマイリンMC, ヤシマスミロディー水和剤, ヤシマダイシストン粒剤, ヨネボン水和剤, ランネット45DF, ランマンフロアブル, リーズン顆粒水和剤, ロムダン粉剤DL, 科研ボディーブロー水和剤, 三井東圧アルバリン粒剤, 三共コサイドDF, 三共トレボン乳剤, 石原ネマトリンエース粒剤, 日産テルスター水和剤, 日産トレボン乳剤, 日農ロムダン粉剤DL

○ 除草剤等

新規> キチット1キロ粒剤, キチットジャンボ, クサキング粒剤, サスケーラジカルジャンボ, ハイキック粒剤, ブイゲットダイナマン粒剤, ホームランキング1キロ粒剤51, ホームランキング1キロ粒剤75, ホクコーホームランキング1キロ粒剤51, ホクコーホームランキング1キロ粒剤75

変更> MCP P-AL, クミショットSM1キロ粒剤, ゴーゴーサン乳剤30, シバキープAL, トレファノサイド乳剤, ニューファムMCP P-AL, ブロンコ, ヤシマカルナクス, 三共の草枯らし, 武田トレファノサイド乳剤

○ 植調剤等

変更> STジベラ錠, ジベレリンTM顆粒, ジベレリン協和錠剤, ジベレリン協和粉末, ジベレリン明治, ジベレリン明治錠剤, フルメット液剤, 武田ジベラ錠

○ 失効農薬

アグロススミチオンゾル, アグロススミチオン乳剤70, オキシンドー水和剤, カヤクキタジンP・ダイアジノン粒剤, クミアイコラトップ粒剤5, クミアイトップジンM粉剤, ダイボルト水和剤, タカマシン, タケヒットゾル, トモノ硫酸ニコチン40, ネマクロペン油剤, ヒノディブバッサ粉剤, ホクコーカヤベスト粉剤10, ホクコーモーダウン1キロ粒剤, ボルスター乳剤, モーダウン1キロ粒剤, モンガードランガードマクバール粉剤DL, ヤシマカヤベスト粉剤10, ヤシマバイジット粉剤2, ヤシマヒノクロア粒剤, ヤシマフジワカヤフォス粒剤, ヤシママクバール水和剤, ヤシマミプシン粒剤, ヤシマモーダウン1キロ粒剤, ヤシマモンセレンアドマイヤー粉剤DL, ヤシマレルダンモンセレンマク粉剤DL, 金鳥スミナイス乳剤, 三共コラトップ粒剤5, 三共チウラム, 三共ラブサイドフロアブル, 日産モンカットラブサイド粉剤DL, 日曹トリアジン水和剤50

※農薬の登録失効は、同一成分の農薬においても販売メーカー毎になりますので、ご注意願います。

Ⅲ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 3月25日から4月24日)

気象庁 (平成18年3月24日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	40	40	20
日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
向こう1か月の平均気温は平年並でしょう。降水量は平年並か少ないでしょう。
日照時間は平年並か多いでしょう。

<1週目の予報> 3月25日(土曜日)から3月31日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か低い

<2週目の予報> 4月1日(土曜日)から4月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

<3週目から4週目の予報> 4月8日(土曜日)から4月21日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

Ⅳ. テレホンサービス

4月から普通作物、園芸作物を統一します。24時間年中無休で情報を提供しています。病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号：029 (226) 5321, または 029 (226) 6131 (情報の内容はどちらも同じです)

今後の内容予定

- 4月上旬 麦類赤かび病と、ナシの病害対策について
- 中旬 施設野菜病害虫の発生現況と防除対策について
- 下旬 小麦赤かび病とナシの病害虫対策について (1)
- 5月上旬 小麦赤かび病とナシの病害虫対策について (2)